蘇芳集

大文字

高橋 さえ子

太陽の余熱のいろかトマト熟れ

湧水の音を離れず更衣

ががんぼの脚が残れる楽屋裏

琴かかへ芸術祭の上野山

明王の肩をそれたる一葉かな

江の電の灯が近づくや露けしや

洛北はちちの赴任地大文字

芒種とか

青山 丈

笊干してありこの辺の梅雨の明け

芒種とか窓明けて顔出してみる

噴水の前でズボンを上げ直す

片肘を車窓に立てて麦の秋

青柿を見てきたままで家に着く

海や山川の物まで盆支度

飲みながら水のぬるむよ広島忌

虫時雨

植松安子

百日紅実となりそよぐ空深し
掃く塵に今日も落蝉まじりをり
走車音潮騒めける路地無音
ぬれ縁に一人の月見虫時雨
虫りんりん仕事盛りの子は遠し
待つ電話短く切れて夜長かな
虫時雨明日を思ふ灯に一人

虫しぐれ

金田きみ子

橋の上にぽつんと屋台星まつり
風をゆたかに午後よりの白芙蓉
子とあれば話などなく遠花火
霧とんで切株白く残りたる
道順になきくらがりの虫しぐれ
一雨後のどれも濡れ石草の花
秋陰や上野に古ぶ数多の碑

晩年

上林孝子

晩年や白粉花に指そまり
夜濯の音はばからず独りの居
小判草ふれて音なし淋しかり
父母と在りし日のごと蚊遣焚く
遺影には遺影の月日夜の秋
子に押され薫風の中車椅子
虫干しの軍事郵便兄は亡し

ララバイ

小島みつ如

大百日紅空を深紅に塗り止まず
盆の膳インスタントの汁なども
盆過ぎの海おとなしく日を返し
秋暑なほ午前と午後の部屋移り
新涼や洗濯物を畳む縁
人それぞれ花にも個性酔芙蓉
丑三つの虫鳴く吾へララバイよ

浜降祭

真保喜代子

並木にも注連張り祭近づきぬ
アスファルト灼けて海の香濃き日かな
何事も祭終つてからのこと
浜降祭神事の間の海静か
朝風に流るる祝詞浜祭
海に入る前の神輿の勢ひ立つ
祭より離れて海を見る一人

鳥渡る

長沼三津夫

障子貼つて昼の海鳴り間近にす
柿干して山の日射の間近なる
裏海の刈田つづきに騒ぐなり
霊山の霊水として水澄める
波音の刻をきざめる鳥渡る
山裏に広がる裔の豊作田
夕映の刻過ぎやすし大刈

八月

八木下末黒

佃煮のあさりこうなごあぶら照り
池の亀浮いて動かぬ大暑かな
深川晩夏寺町を歩くかな
蝉しぐれ落ちたる蝉の足掻くかな
片付かぬ火事の一軒敗戦日
岡晴夫聴くや八月十五日
ゆるやかに川の曲がるや橋涼し